

第二球。

ぐうつと曲がるカーブ。

わずかにはずれたように

見えた。

ポール。

わたしは、そう言うのとい

つしよに、心の中で「スト

ライクだったかもしれない

ぞ」と、ささやくを感じ

た。

ピッチャーの方を見た。

その時のわたしの目には、

すみません」というよう

な気持ちがかめられていた

にちがない。

二球目は、ピッチャーは、難しい。ツチヤを出して倒してやろうと思つたのだらう。自信をもっている。大事だ。う。バツターにとつて、打ちにくい球だ。一球目はストライクだったから、二球目は、ボールかな。筆者の審判は、ボールを真剣に見ている。

「見た」だから、ちよつと自信がない。でも『ボール』と言った。一球目のストライクは、声高くきけんだけれど、同時にストライクかもしれないと不安になつてゐるから、第一球のときみたいには、声高くきくべくなかつたかもしれない。な。自分で自分に「ささやくやしいだらうな、迷つてゐることが分かる。審判を始めところのことだから、自信がないんだ。どちらとも言える球で審判は、困つてい

ピッチャーの方を見たのは、自信がなかったからだな。「ごめられていたに
 がいない」だから昔のことを思い出している感じがするなあ。審判は、「ピッ
 チャーの方から見れば、きつとストライクだと思ってるだろうなあ。」と
 思つて「すみません」という気持ちになつたと思う。ひよつとして、ピッ
 チャーが、審判をゴロリとにらんでいたかもしれない。ピッチャーと目が
 合ったのかな。反対に「ストライク」と言つたとしたら、バッターに「す
 ません」という気持ちになつたと思う。「ピッチャーは、怒ってるかな。」と
 も審判は、思つてるのかな。それほどこわどいボールだつたんだなあ。